丸の内同窓会会報
公孫樹

発行所
高知丸の内高校同窓会
代表　戸田　隆
〒780-0850 高知市丸ノ内2-2-40
TEL(088)873－4291
印刷　㈱高知新聞総合印刷
題字　内川　道子（丸4回生）

## 総会報告と課題

同窓会長　丸11回生　**戸田　隆**

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらない中、令和四年七月執行委員会・理事会を開催し、本年度の総会開催の是非について協議。三年間総会・懇親会を開かないのは、いかがなものか？との意見が大勢を占め、総会は昨年通り書面議決方式で実施。ミニコンサート、懇親会は形を変えて実施することとなりました。名称も「丸の内高校同窓の集い」として十二月十七日に高知会館で開催。

七十名ほどの同窓生の参加者をいただき、久しぶりに交流を深めることが出来ました。

又、本年度も活動の重点課題として組織の強化、拡充を掲げました。これは同窓会の永遠の課題だと思います。ただ本校は、幾度の学制改革・改編により組織の継続化に支障を来しております。なかでも、昭和四十三年卒業（19回生）～平成十六年卒業（55回生）の三十七年間の同窓生活動が見えていないのが現実です。全く皆無ということではなく、少しずつではありますが、理事に入っていただいている方もいらっしゃいます。

新型コロナの影響で、寸断を余儀なくされておりました社会・経済文化活動も徐々に回復され、今年の関東支部同窓会は五月十八日に原宿「水交会」、関西支部の同窓会は六月二十五日に「ホテルグランビア大阪」で盛大に開催されました。

ともに、久しぶりの同窓会にわきあいあいと旧交を温めていました。

これを機に、本部といたしましても重点課題の組織の強化、活性化に取り組まなければと、思っています。そこで本部・関西・関東の垣根を越えて知人、友人、先輩、後輩、縦の糸、横の糸のアンテナを張り巡らせて一人でも二人でも同窓会に入っていただくように、各個にお声がけをいただくようお願い申し上げますとともに、同窓生におかれましては、母校丸の内高校の伝統を受け継ぎ、継承していくために、組織の強化・充実にご理解をいただき一層のご協力をいただきますようにお願い申し上げます。

### 同窓会の皆様へ

## ☆★☆ 着任のご挨拶 ☆★☆

校長　**藤田　勇人**

令和五年四月一日付で、第三十六代校長として着任いたしました藤田勇人（ふじたはやと）と申します。歴史ある高知丸の内高等学校に勤務できる喜びと緊張感をひしひしと感じております。同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動に、ご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、明治二十年創立の、高知県尋常中学校女子部に源を発する本校は、高知県立高等女学校、高知県立高知第一高等女学校と変遷し、戦後の学制改革により、昭和二十四年、高知県立高知丸の内高等学校として発足いたしました。

以来、高知県下の学びの一翼を担いながら、社会のあらゆる分野において、多くの有為なる人材を輩出し、地域の発展に大きく貢献して参りました。数多くの地域のリーダーを育ててきた普通科と県下唯一の音楽科が互いに競い合いながら成果をあげているのは、地域や同窓会の皆様方の永年にわたるご理解とご支援のおかげです。常に本校に温かいまなざしを届けてくださる皆様方に対し、厚くお礼を申し上げます。

今後も、本校は、「志をもち、『夢（進路）の実現』に向かう、知・徳・体を育成し、自主自律による社会に貢献できる人づくり」を進めて参ります。

また、教職員が一体となってきめ細やかな学習指導・進路指導・生徒指導を行うことにより生徒たちの成長を支援し、「学びは楽しい」を実感できるよう日々努力を重ねて参ります。

今、世界は大きく変化しています。グローバル化が進み、人工知能（ＡＩ）の発達も目覚ましく、今話題の対話型生成ＡＩである「ＣｈａｔＧＰＴ」は、昨年（令和四年）十一月三十日に公開されると同時に世界的話題となりました。そして、わずか半年足らずで文部科学省から適切な使い方についての通知が出るなど、

変化の速さも今までにないほど驚異的な様相を呈しています。

このような変化の中で、数年前から本校では生徒に「論理コミュニケーション力」を身につけさせる取り組みを行っています。「論理コミュニケーション力」とは、「多数派に依存せずに社会的に受け入れられる方法で自分の論を発信できる力（一般財団法人ＳＦＣフォーラムホームページより）」です。「根拠や事例をもとに意見を持つ・相手に伝える」を柱に据えて、人間関係を構築する力や学んだ知識・技術を応用実践する力の育成に努めています。これからの時代は、人間の役割として「新しい価値を創造する」ことが大きくなってきます。生徒たちが、社会のリーダーとして必要な資質を身につけ、「新しい価値」を実現していけるように、必要なコミュニケーション力を育てていきたいと考えています。

私自身も校長として、これまでの経験や見識を総動員しながら、教職員と共に「夢をかたり、夢をはぐくみ、夢をかなえる学校づくり」に邁進していきたいと存じます。校長室は常に開かれています。忌憚のないご意見、ご要望、そしてご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## 謎三つ

丸５回生　**池神　重明**

本稿では、私が抱いている母校にまつわる謎について記してみたい。

まずは入学に関して。私達の頃は、高校へは希望者全員が入学出来る時代であった。普通科については、高知市内に三校あり、追手前、小津、丸の内の何処に入るかは抽選によると記憶している。この抽選について、どのような方法だったのか。百三十年記念誌を見ると、３回生の方の記述では「こよりのくじで分けられ」「私の引き当てたこよりの先の記号はＭ。人生の岐路はあっけなく通り抜けました」とある。

８回生、９回生の方も〝くじびきで〟決められたと述べている。

さて私達５回生はどうだったのか。抽選ということは朧げに記憶しているが、自分の手でくじを引いた記憶は全くない。引いたくじなるものも手元に残ってない。後年、５回生の友人に聞いた時には「各校の先生が、志望者の名前を書いた札を五十音順に代わりばんこに引いていたんじゃないか」と言う人もいた。自分がどの学校に決まったかを、なんで知ったかについても、定かな記憶がない。抽選の結果が郵送されてきた、何処かに掲示されたのを見に行った、中学から知らせが有った、等の記憶も無し。

言えることは、丸の内高と判った時に特に喜んだり、がっかりしたことは無かったこと。お城間近の緑多き環境、良き先生、良き級友に恵まれ、三年間を過ごすことが出来た母校、丸の内高校に感謝するのみである。

次は校歌についての謎。記念誌には、昭和三年制定の高知県立高知第一高等女学校の校歌、昭和十年制定の校歌、そして昭和三十年制定の高知県立丸の内高等学校の校歌、の三つの校歌が掲載されている。我々５回生の卒業は昭和二十九年三月。はて、当時校歌は無かったのか。校歌を斉唱する機会は何度かあったと思うが、一番記憶に残るとすれば卒業の時か。ところが私には卒業式の記憶が全く無い。確か進学の手続きか何かで出席できなかったように思う。

しかし、うろ覚えながら、「青空を流れ行く雲、果てしなき希望を乗せて……」なる歌詞が浮かんでくるが、自信は全く無し。どこかに在校当時の校歌が、印刷物として残っていないか探したが無い。どなたか新制丸の内高校発足時の校歌をご存じの方は居られないか、と思っている。

三つ目の謎は、昭和四十二年の女子校への復帰と平成十七年の再びの共学化である。

何故共学から女子校に戻ったのかは、記念誌を見ても判然としない。１回生の方が「男子生徒の入学が漸減した背景については触れておられない。このことで以前級友に尋ねたら、女子校復帰に不満の彼が言うには「丸の内の先輩が教育委員会におられんきに、こうなってしもうたんや」と、首を傾げるような返事が返ってきた。普通校志望の男子が急に減った筈も無いだろうし、少数派である男子が苛めにあうことも無かろう（笑）。

更には平成十七年には再び男女共学に戻っている。この三十八年間は何だったのか、当時のいきさつを一卒業生として知りたいものである。

## 私の高校時代
### ―茫々―

丸８回生　**中川　豊**

当時の丸の内高は、二階建ての木造の校舎と戦争で焼け残った講堂があり、校門の近くには浜木綿が時折白い花を咲かせていた。現在のグラウンドから西へ百メートル位離れた処に、

民家に囲まれた小さな広場があった。そこにテニスコート一面とバレーコート二面があり、ひっそりとポールが立っていた。広場の片隅には、人一人入れる位の倉庫小屋が、草に囲まれて建っていた。そこのバレーコートが、私達の放課後の舞台であった。

顧問の先生は、バスケットや剣道の先生が時折声を掛けて下さっていたが、三年時には国語の先生が毎日コートの後に座って練習を見て下さり、時には励まして下さっていた。

部員は市内の中学校で優勝経験のある学校のエースが毎年数名入っていたので、自分たちで力を出し合って雨の日以外は毎日練習をしたものだ。当時は、追手前・土佐女子・嶺北・市商などがトーナメントの上の方で丸の内と競い合った。

部員の中に忘れられない親友がいた。彼女は早くから母親を病気で亡くしたので、二人の弟と幼い妹の母親代わりをしながら、おばあちゃんの育てた野菜をリヤカーに積み、おばあちゃんも一緒に乗せて自転車で引っ張り、追手筋の日曜市に毎週朝倉から通っていた。彼女はチームの中軸として皆から信頼され、三年時にはキャプテンとして尊敬され頑張っていた。卒業後は岡山の紡績会社に勤め、そこで知り合った彼と結婚し、二人で外国の有名ブランドの品物をつくる縫製工場を立ち上げ、業界からその手腕を買われていたようだ。

しかし、六十歳を過ぎた頃病魔に襲われ、ご主人と一人娘を残して逝ってしまった。最後まで親友として仲良くさせてもらっていたので、淋しく思っている。

話は元に戻るが、バレーボール部は三年間一度も負けたことがなかった。全国大会にも三回行かせてもらった。当時は旅館に泊まるにもお米持参で、一合ずつ長い袋を区切りながら一泊三食分をまるで蓮根のように結んで、泊数分ユニホームと一緒にカバンに入れた。

熊本、仙台、前橋と三年間参加させてもらった中で、どこだったか忘れたが、「東京から来たの？」と問われたことがありびっくりしたが、私達のユニホームの胸には『丸の内』の文字があったからだと、後に皆で大笑いだった。しかし嬉しかった思い出だ。

私にもボーイフレンドがいた。恥ずかしいので言葉を交わすことはなかったが、専ら文通で。中味は映画の話や学校での出来事。私は文字の美しい彼に憧れていた。その彼に男子の親友がいて、悩める親友の話を聞いてあげようとある時、優しい彼は私を自転車の後に乗せ、西風に向かって伊野まで行ったことがある。どんなにか重くて大変だっただろう。彼の親友を思う温かい友情、青春の心あたたまるエピソードとして、時々懐かしく思い出している。

娯楽の少なかったこともあって、勉強することが楽しみだった。平家物語や奥の細道、漢詩や数学、知らないことを知る感動は、大人になっても興味を持ったり、楽しみの教養としての入り口へ誘ってもらったように思う。

私の小さな人生の中でも高校時代は、かけがえのない友情の中で過ごしていたように思う。

しかし高度成長期に入って、育て上げた子供達を都会に送り出して、六十年が過ぎた今、人口は三千人余りになってしまった。手入れがゆき届かなくて生い茂った草木と、独居の高齢者の暮らしが残っている。一人でボンヤリとよく山を眺める。昭和三十年代に私の親達世代が植林した杉の木が生長して、あちらにもこちらにも杉山ばかりの景色となってしまった。

でも山の稜線の形は、昔も今も変わらない。吉野川を挟んで、南にそびえる梶ケ森の尾根と、北に位置する国宝薬師堂のある寺内の山の頂との間を、川は蛇行しつつもゆっくりと流れる。雲も休むことなく毎日毎晩、北から南へ、南から北へと風に乗って往復する。

草引きの手を休めて空を見上げ、雲の動きで明日の天気をも占ったりしながら暮らしていると、年を経たせいか一日はあっという間に過ぎる。

人の姿もまばらになり、一時盛んだった山間地域への道路や治水の工事も少なくなり、農薬の使用も減ったせいか、絶滅かと思われていた生き物が復活し始めた。

春の夜にコロコロと美しい音色で鳴く「カジカがえる」の声や、梅雨時の闇に舞う蛍の光も戻ってきた。自然は私が幼い頃に見た風景を、六

## なんでもない山里の暮らし

丸20回生　小笠原美衛

私が小学校の頃、大豊町には二万人の人が住み、ほとんどが大家族で、各々町内で仕事もあり、商店も並んでいた。

十年ぶりに再び見せてくれ始めたようで、懐かしく嬉しい。

退職して家周りで過ごす時間が増えて気づいたことがある。何と豊富な野鳥たちが、里山には住んでくれていることか！　朝日が昇る前から日が落ちるまで、鳥達の囀りが終日絶えない。今の季節ならウグイス・ホトトギス・シジュウガラ・コジュケイ・山がら・ヒヨドリ、そしてめったに人に姿を見せない「火の鳥」と言われるカワセミ科の鮮やかな赤い色の渡り鳥「アカショウビン（水恋鳥）」が、林や渓流あたりで、キョロロロロと高音から低音へメロディーが流れ落ちるように、謳うのがよく聞こえてくる。

五十年ほど前、私は大豊町から丸の内高校へ汽車通学をしていた。冬場は朝薄暗いうちに大田口駅を六時半発の列車に乗り、帰り着くのも暗くなっていた。冬は停車している汽車がレールとホームの間へ、白い蒸気スチームをシュワシュワと噴出していて、その汽車めがけて毎朝間に合いかねて走り込んだ。家から駅までの雪道で、いつもソックスも濡れて冷たくなり、列車で二駅位を通過した頃に、車内の足元のスチームの熱で足の感覚が戻ってきたことを覚えている。

高校時代の思い出は、私にとっては朝に晩に汽車通学に明け暮れた毎日が、体にも心にも深く沁みついて残っている。若い頃の出来事は、ついこの間のようにも思えるが、私の一生もアッという間にはや七割以上過ぎてしまった。

うちの庭に私が生まれる以前から、すでに屋根より高く伸びた「はくの木」があり、今も青々と茂り続けている。私の命が終わってもこの木は、まだまだ生き続けるのだろう。自然に比べると、人の命は短くはかない。早かれ遅かれ私も消えて無に帰してゆくのだろうけれど、ただじっとして何もせず、消える日を待っている訳にもいかない。

この先どうやって時を過ごす？　毎日をどうする？　この年齢では、新しく何か事を起こす気はもう無い。途中つらかったことも時が過ぎ去った今は、忘れられることは忘れて、心穏やかに私なりの幸せ気分を満喫して過ごしたい。自然に包まれ、それに自分を同化させて生きるのが、私にとっては一番心地よい。暮らしはその日の天気に合わせ、体調に合わせ、気分ののらない日は無理をしない。

気分ののる日は、エンジンを響かせて汗を流して刈払機で草を刈る。自分が食べる分量の野菜を育て、手入れ後はスッキリ気分に浸れる畑仕事を愉しむ。あれやこれやで動いていると一日は過ぎてゆく。

今この梅雨の季節は、長雨でうんざりはしていても、窓から眺めればアジサイはハッとするほど、シャキッと色鮮やかに咲いてくれている。

線路に目をやれば、大田口駅をは看過する特急列車だが、上り下りと本数も多く鉄道ファンがシャッターを押しに来る風景でもある。

食料品を載せて近づいてくるトクシマルの歌が聞こえてきた。山里のなんでもない暮らしは、「限界集落」と言われながらも、消滅もせずに今日も続いている。

## 「人間・牧野富太郎」伝を出版して

丸9回生　谷　是（ただし）

### ヤマモモにキッス

私の丸の内在学中の頃であったと思う。当時、わが校に上村登（みのる）先生という生物学の先生がいた。この人は植物学の専門家で牧野富太郎に師事し、早くから牧野のことを研究していた。若い頃には、県立佐川高校にも奉職していたと聞いたが、当時は、まだ牧野を知っている古老もたくさんいて、佐川では手紙や資料を見ることができた。それをまとめて、ずいぶん早い時期に「牧野富太郎傳」（初版昭和三十二年　六月社）を発行した。牧野が逝去したのは、昭和三十二年一月十八日（九十四歳）であるから、生前であった。

私はそれを一読して大変感激した。一介の植物学という地味な人に、このようなドラマチックな人生があったのか、これこそ〝学問の志士〟だと思ったのである。

この頃、上村先生を中心に、九十歳を超えた寝たきりの老先生に、土佐のヤマモモの実を送ろうという話が出た。「ヤマモモ」という実は〝足が速い〟というか、枝を折るとみるみるうちに萎えて弱ってしまう。航空便ができて、早く届きそうだということで、丸の内高の在学生が中心となり、荷造くって依頼したものである。もとより牧野博士も「ヤマモモ」は大好き。東京都練馬区大泉の自宅へ届けられたが、高知新聞東京支社の山本記者が同行して、博士がヤマモモに喜んでキッスしている写真が同紙に出たことがある。私はその写真を見たとき、何と良い記事かとこの前のように思い出す。

### 「牧野富太郎のすべて」展

以来、「牧野」という名前は、いつも私の胸底に棲み続けていたが、いつの間にか、私の講演の「持ちダネ」になり、前後五十回ばかり県内の牧野植物園、東京・広島などで講演を

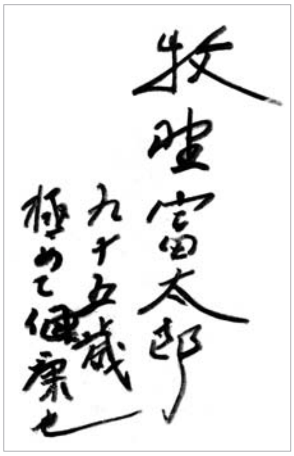
続けた。私は高知新聞社に入社し、東京・高松などに勤務していたが、高知新聞企業事業局へ出向して、文化事業に携わった。その頃、牧野富太郎の生誕百三十年に当たり、展示会を平成四年八月から「高知大丸」でやりたいというニーズがあり、地元佐川からの声も知り、「牧野富太郎のすべて」と銘打って行ったが、東京練馬の大泉の牧野邸への遺品の借り出し交渉、遺族の四女・玉代さん（岩瀬）との接触、ご親類の面識を得て、ついに玉代さん他一行がご来高することとなり、テープカットにご参加を得、事業としても成功を収めたことがある。

## 出版の浮上

あの頃から幾星霜、……あの頃の若い仕事も過去となり、「牧野」とも去っていたが、昨年東京在住の谷村鯛夢氏が突然来高され、私の東京での講演を思い出されて、あの話を是非活字にしないかと勧められた。そして「集英社」にも話をつけていただいて、足りないところは自分が補足するとまで言われるには、全く私は頭が下がり、一切をお任せすることにした。彼は室戸市出身の俳人で、出版プロダクションのプロデューサーの仕事をし、出版の大ベテラン。その道に堪能な人である。

その結果出来たのが、今回の「らんまんの笑顔・人間牧野富太郎」伝（二〇二三年　集英社発行　一六〇〇円＋税）である。そのため「語り下ろし：谷是、書留：谷村鯛夢」の共著となっている。

（集英社より掲載許可済）



牧野富太郎直筆礼状

博士にヤマモモ　輝く思い出

家の畑からよりすぐりの枝付き

久家さん（南国市）67年前贈る

病床の最晩年　上機嫌でむしゃむしゃ

高知県花ヤマモモ「そりゃよかろう」

博士が決める

2023（令和5）年6月13日付朝刊▶

（高知新聞社より掲載許可済）

## 独学の鬼

牧野富太郎は小学校二年しか行っていない。明治五年佐川にも学校ができたが、それは「いろは」から始める教育で、寺子屋や伊藤蘭林の塾や名教館（めいこうかん）ですっかり身につけており、正式の学校に行っても、こんなことなら時間がもったいないと学校をやめてしまう。正式の学歴は二年足らず。それが災いして東京大学植物学研究所に出入りは許されても、教授・助教授にはなれず、助手・講師しかなれない宿命にあった。給料が上がらない。しかし研究の為には

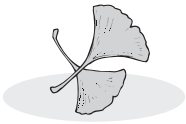
### 谷　是（ただし）氏の略歴

昭和14（1939）年高知県高知市生まれ。

高知大学文理学部卒。高知新聞社入社後、東京支社副部長、高松支社長などを歴任。この間、「牧野富太郎のすべて展」他を主導。『高知県人名事典・新版』編集委員。退社後、土佐史談会副会長、高知市文化財保護審議会委員など歴任。著書に『鏡川の流域に生きてー土佐藩典医「はしご灸」の家　谷家の奇跡』ほか。共著に『坂本龍馬全集』『山内容堂のすべて』『炎の軌跡―土佐企業人物語』。

著書に『高知県の不思議事典』『高知県謎解き散歩』。講演多数。画家として個展を十数回開催。

ここに出入りしなければならないと自覚し、原稿書き・講演・採草会の指導・製図など猛烈な仕事をして収入を得ようとするが、子供は十三人。育ったのが六人。万年講師の貧乏生活に耐え続けながら、生活は悲惨なものであった。しかし夫人壽衛の助けもあり、多くの友人・資産家から援助もあったが、少しも悪びれず、自己の信念を貫き、未知の植物に名前を付けて、日本の植物研究を世界のレベルに上げようとする。図録を完成し、誰もが研究できるようにこの大業に一生をかけたのである。ついに千種の植物に命名し、六百種の変更分類を果たし〝世界の牧野〟と言われる業績を積んだ。九十四歳の逝去の日、〝その足に触らせてください〟と言った新聞記者が「これが九十四歳の老人の足か、ごつごつした立派な足で、山から山へ谷から谷へ渡った天地自然がつくった足だ」と驚嘆したと言う。九十歳を過ぎても「時間が足らん、時間が足らん」と言った老学徒を憶いたい。ドラマも結構だが、富太郎の真像を知ってほしいと考える。



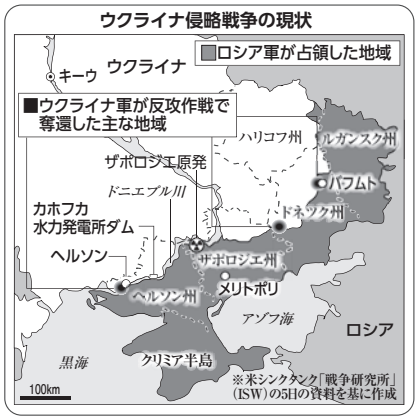
## 回 最近の世界情勢 回
# ロシア・ウクライナ戦争

丸12回生　立元　稔章

最近の世界情勢において、①ロシア・ウクライナ戦争の行方？　②習近平はいつ台湾侵攻を決断するか？　がもっぱらの重大関心事であることに、異論を挟むことはないと思う。

＊ロシアを「露」、ウクライナを「宇」と以下記す。

二〇二二年二月二十四日、プーチン大統領は、宇国ルハンシク州とドネツク州「人民共和国」からの要請に従い、同地域の住民を保護し、宇国を非軍事化・非ナチ化することを目的とする「特別軍事作戦」を開始すると宣言し、宇国全土への攻撃を始めた。侵攻時の露軍の総兵力は、兵員十五万人、戦車三五〇〇両、装甲戦闘車一二〇〇〇台、戦闘機一五〇〇機、その他砲・ミサイル等他種多様な兵器を装備し、宇国の首都キーウ、北部のハルキウ州、南部のヘルソン州やザポリージャ州に侵入し、チェルノブイリ原発やザポリージャ原発を占拠した。




対する宇軍は、兵員三十万人、戦車八六〇両、装甲戦闘車二五〇〇台、戦闘機一二五機、その他砲兵器は露軍の三分の一という超劣勢であった。

開戦当初、宇国は一部の政府高官や高級軍人を含め国民の大多数は混乱し敗走したものの、米英の軍事顧問団の助言と協力の下、オープンソースの情報を活用した機動防御と被害極限を図りつつ、露軍の兵站線の弱点を突いて鉄道や橋梁を通行不能にして進軍を阻むとともに、欧米の支援による防空網を堅持して空挺部隊の投下及び地上部隊への航空支援を拒み、部隊の前進拠点となる補給処の建設を阻害するなど、様々な抵抗で露軍の電撃的大攻勢をキーウ近辺までに頓挫させた。そして終には、露軍を三月末には首都キーウ周辺から撤退させた。その際、キーウ近郊のブチャなどでは、露軍が撤退した地域で虐殺などの残虐行為が明らかになり、国際社会に強い衝撃を与えた。振り返ってみれば、宇国は一九九一年十二月にソ連邦崩壊に

ランチ　450円から　仕出し　1000円から色々あり

手作りの味に真心を添えてお届けするお弁当のパイオニアです
おいしさとボリュームが皆様に大好評です

配達いたします　(有)川島食品　Tel.　088−873−2434
代表　川島　美代（丸8回生）

よって分離独立した。しかし旧ソ連製の多量の核兵器が残されていたので、核放棄の道を選択し、一九九四年十二月五日核拡散防止条約（ＮＰＴ）への加盟を機に、米・英・露の後ろ楯を得て「独立と主権及び既存の国境を尊重するとの『ブカレスト覚書』」を交わしていた。にもかかわらず、露国は二〇一四年二月二十日、黒海及び中央アジア・コーカサス地方への影響力行使のためには絶対に手放せないクリミア半島の奪還を目指し、ドンバス地方の親露派住民の武装蜂起を煽り、ここに一方的に併合した。

以来、宇国はＥＵ加盟を前提に米英・西側諸国への接近を図り、軍政と軍略の西欧化に踏み切り、国政と一帯となった改革を断行した。開戦当初から西側諸国は露国による宇国侵略に対し、善戦する宇国への武器供与などの軍事支援を続けている。キーウ攻略に失敗した露軍は、その後態勢を立て直し、五月には東部・南部四州の制圧を宣言するとともに、住民の露国化を進め、占領の規定事実化を図った。

これらの地域の併合は、「露国領」への大規模攻撃には核も含めた報復もあり得ると恫喝することで、宇軍の反撃の手を緩めさせるとともに、西側諸国への各種支援を牽制する意味合いも込めていた。

一方宇国は、西欧諸国取り分け米国から多連装ロケット砲や対空レーダー兵器の供与を含む軍事支援を受け、ハルキウ州・ドネツク州・ヘルソン州で反撃に出た。九月以降宇軍は驚異的進軍によって、ハルキウ州の大部分を取り返し、ルハンシク州及びヘルソン州奪還作戦を遂行している。宇軍の反撃で劣勢になった露国は、九月二十一日には部分的動員令を発令し、予備軍人三十万人の招集を始めた。だが部分的動員令は、招集に反発する多くの国民が国外に脱出する混乱を引き起こした。こうした露国の思惑とは裏腹に宇軍による東部と南部の攻勢は続いている。十月八日にはクリミア半島と露国本土とを結ぶ橋が爆破され、露国は宇国の攻撃と断定し、報復と称して首都キーウを含む宇国各地に大規模ミサイルやドローン攻撃を実施した。その後も大都市を中心にインフラを破壊する攻撃を続けるなど、戦争は地域的にも再拡大している。

露国はまた十月十九日に一方的に併合を宣言した宇国東部・南部四州に戒厳令を敷き戦時態勢を強化したが、露軍の劣勢は挽回できず、十一月九日に露国国防省は、ヘルソン州のドニプロ川右岸からの撤退を命じ、戦況は益々流動的になっている。この様な状況下で宇軍は二〇二三年春の泥濘期間明けを待つ間、西側諸国からの軍事支援、特に戦車や装甲戦闘車の到着を待ちつつ乗員や整備員達の慣熟訓練や戦術・戦法の錬成訓練に励んでいる。更に航空優勢確保の切り札となるＦ16戦闘機の供与を前提としたパイロットや整備員などの機種更新訓練を鋭意進めているところである。二〇二三年六月一日現在の露軍と宇軍の残存兵力比は、露軍は兵員数三十万六千九百人（死傷者数二十万八千人）、戦車千五百両（被破壊数二千二十一両＋被鹵獲数五百四十五両）、装甲戦闘車七千二百二十三台、戦闘燃料車六千三百十二台、火砲三千五百六十七基、戦闘機九百九十四機である。

宇軍は兵員数五十万人（死傷者数十万人）、戦車千四百両（うち西側供与数六百両）、装甲戦闘車六千五百台、火砲千五百三十六基、戦闘機百二十五機となっており、戦闘機数以外はほぼ拮抗している状況にある。今後の両国の戦況の帰趨は、露国が攻勢作戦から防衛作戦へと戦略を変換し、長期持久戦へと方針転換した状況下で、宇軍の反転攻勢が露軍の築いた長大且つ重層配備した強力な塹壕陣地を突破することが出来るかが焦点になっている。それを後押しするのが、Ｆ16マルチ戦闘機の早期戦力化による露軍航空兵力の鎮圧である。

にもかかわらず七月現在Ｆ16供与の状況は、機種変更訓練遂行中との情報が漏れ伝わってきているだけで、二〇二三年末になるようだ。それにしても西側諸国からの武器供与は足並みが揃わず、宇軍の反転攻勢の足を引っ張っているのも現状である。

停戦に向けての動きも諸々みられるものの、習近平総書記が二〇二三年三月二十日～二十三日にモスクワを訪問し、プーチン大統領と会談した。表向きは露宇戦争の即時停戦を訴えた十二項目の和平提案であったが、真の狙いは露国の敗北を阻止するための各種支援を具体化する話し合いであった。具体的には、①石油・天然ガス、②精密兵器用半導体、③弾薬原料の化学物質、④軍用車両部品、⑤兵員用被服などの輸入促進、及び六月一日のウラジオストック港の開放や中露間鉄道輸送や国境通関手続きの簡素化、沿海州における中国人の商業活動のオープン化などであった。習近平はこの会談を通じて、プーチン支援に舵を切ったのである。会談直前には、国際刑事裁判所（ＩＣＰ）がプーチンに対し、宇国から子供の連れ去りに関与した疑いがあるとして、戦争犯罪容疑で逮捕状が出されたにもかかわらず、あえて「プーチン支援」に踏み切ったのは、同氏を見捨てれば宇国戦場で露国が敗北し、プーチン態勢が崩壊し

兼ねないからだ。まかり間違っても、民主化・親米政権が誕生するような事態になったら、悪夢であると。

露国の勝利は望めないとしても、なんとかプーチン体制の下で、「弱体化する露国」が生き残ってくれた方が、都合良かったのだ。そうなれば中国に依存する以外に、露国が生き残る道はないからだ。

西側の経済制裁を受けている露国は、中国に格安で原油とか天然ガスを提供する見返りに、民生用半導体をはじめ西側製品を供給してもらっている。戦後は益々中国依存が高まる中国は対露貿易を人民元建てにするだけで、事実上露国経済を手中に収められる。その先にあるのは、露国を飲み込んだ「大中華帝国」の誕生であろう。油断禁物なり、中国!!

## 追憶

丸17回生　**戸田　隆彦**

一九七〇年（昭和四十五年）三月、社会福祉法人高知慈善協会が経営する養護施設（児童養護施設）に児童指導員として勤務することになった。学生時代は老人の方に興味があり、友達からは戸田は「かわっている」との声があったが、別に気にはならなかった。

三年の夏に、箱根にある宮城野の養老院（特別養護老人ホーム）に実習に行くことになった。実習中日曜日は休みのため、近くで草花を採集し、押し花にして実習日誌に貼りつけ、担当教授にそのままで提出した。その後も養老院にたびたび足を運んだことを記憶している。その当時養老院に勤めていた大学の先輩が「戸田よ、本を読め。人の心情がわかるのは恋愛小説だよ」と言ってくれたのが今でも脳裏に焼き付いている。将来の糧になるようにとの心遣いだったと思う。

卒業となり、東京方面で就職しようと養老院を探したが見つからず、親から高知で養護施設が人を探しているとの連絡を受けて、児童指導員として勤務することとなった。その時の養護施設愛仁園園長は岡上守材（故人）といい、坂本龍馬の姉乙女の孫にあたる。母は岡上菊栄（故人）であり、高知県の福祉関係では有名な人であった。高知慈善協会は高知の福祉の中核を担ってきた歴史がある。その中に菊栄会という集いがあり、岡上園長も行っていたことを思い出す。

その頃、愛仁園は大舎制であった。小学生から中学生までが一つの部屋で生活していた。何不自由なく生活していた私は、彼ら彼女らの生活に放り込まれたというのが第一印象だった。彼らのほうがここでは先輩であった。とにかく「いっしょ」になることが必要だと思われた。そんな中で、ある女子中学生から「えらそうなこと言いな、私らあの家庭の生活を知らんろう」と言われ、絶句したことがあった。一呼吸し「わからんけどわかろうとする気持ちはある。今は一緒に生活しゆうやんか、前向いて歩こう」と言うのが精一杯であった。また園の生活になじめず「措置変更もやむなし」という子供がいた。私は夜園長社宅に行き、もう一度見させてほしい（ケアをさせてほしい）と嘆願した。これを園長は聞き入れてくれた。思うに無理だけど、もう一度やらしてみるかと思ってくれたのではないかと思う。私たちの仕事は壊れやすい心を相手にしているのであり、信頼関係は砂の上に建物を建てているようなものでなかったろうか。いまだに悩むことばかりである。子どもたちからは「ここにずっとおってよ、どこっちゃあに行きなよ」。その時は「ずうっとここにおらあえ」と答えたことであったが、その言葉を反故にすることになろうとは……。

一九八〇年（昭和五十五年）三月の末か四月のはじめかはっきりしないが、自宅に布師田保育園理事の西

おかげさまで51周年。
南四国ピアノ販売
MPH
高知市越前町2丁目6-22
フリーダイアル
0120-373459（ミナミシコク）
ピアノのことなら　南四国ピアノ販売　検索

川（故人）さんから今から行ってもよいだろうかとの電話があり、要件は園長として来てもらえないか、なんちゃあ心配することはないき、との内容であった。しかし保育園の事は何も知らず、私一存ではお答えできないと返事した。翌日、昨日の話を断ってもらおうと早朝園長社宅を訪ねると先客がいた。その方々が帰られた後に昨日のことを話したが、園長の話は「もうおそいわよ」とのことであった。

布師田保育園の役員には「すぐには使いもんにはならんぜよ。数年かかるぜよ」それでもよいかどうかと聞くと「それでもよいので来てほしい」との返事だったので「了解」と言ったとのことであった。

万事休すであった。仕事でチームを組んでいた保母（保育士）さんに実情を話し、子どもたちに「どこちゃあにいかん」と言ったことを詫びた。

その年の五月六日より布師田保育園の勤務となり、最初のうちは愛仁園にも行き、それから保育園での仕事となった。時々岡上園長が立ち寄ってくれ、心配をかけたことだった。保育園の業務（法人の事、運営管理、財務管理等）は今までに関わったことがなく恥ずかしいほどであった。そのうえこの時代は行革の走りであった。その時親身になり、手取り足取り教えていただいたのは、当時の十津保育園園長の田村光男（故人）先生だった。今思えばただただ感謝するばかりである。特に業務の中で手を焼いたのは、建物の修繕であり、そのことはいまだに続いている。保育界も制度の改革が常にあり、法人改革もあった。そのような中、一九九八年（平成十年）に園長を辞任、法人役員となった。

園児たちはいろいろな話をしてくれる。その時思っていること、感じたこと、家庭であったこと等、一生懸命言葉で伝えようとしている。子どもたちの思考が頭の中で高速回転していると思われる。ときどき話していることが矛盾していることもあるが、そんなことには頓着していない。現実と空想が織りなす世界。子どもたちと話をする時、言葉だけでなく、顔の表情、目の輝き、目元・口元等、体の動きと連動しており、高等な意思疎通を図り、子どもの五感は鋭く直接的ではあるが、伸びやかであることが強く感じられた。大人の五感も鋭さがあるが、狡（ずる）さがあり、時にわからないように狡さを隠す。ゆえに時には、子どもが発する言葉が「グッサ」と胸を刺し貫くことがあるように思われる。今日まで苦しくとも楽しい保育園での生活を、園児、職員、保護者、地域の方々が与えてくれたことに心より感謝したい。

## これまでの七十年、そしてこの先

丸22回生　**徳弘　朋子**

学生時代には「早く大人になりたい。」と思っていたのに、いざ大人になってみると勝手なもので「学生時代は良かったなあ。」と思ってしまう。

自分はそれほど勉強をしなかったのに、子や孫には「大人になって、あの時もっと勉強したら良かったと後悔しないように、しっかり色々な経験をして知識を貯めよ。」などと言ってしまう。

七十年生きて来て自分は何をして、何を残すことが出来たのか？

恋愛、結婚、出産、離婚、再婚と一応フルコース辿って来た。残すは死別のみと夫に振ってみた。「どっちが残るかわからんろう？」と返され、「当然私！」と心の中でつぶやく。

子ども三人、孫三人、これは残すことの出来た者。お金や財産と言える物はほぼ残せていないが、友人は多い方だと思う。これが最大の財産かな。

子どものおかげでＰＴＡ繋がり、ボランティア組織での友人、民生委員繋がり、子ども食堂繋がり、地元団体繋がり、小学生の頃の友人グループ等など、広く浅く、時々深く長く続いているお付き合い。

平成九年一月から民生委員児童委員となり、当時は親子ほど年上の先輩に様々なことを教えて戴きながら三年毎の改選を何度か経て、気が付けば周りはほぼ同年代。本当に月日の経つのは早いものです。

平成二十九年七月に子ども食堂を地域で始めようとの声掛けに、地区民生委員全員が賛同してくれて、今では夏休み後半の五～七日間「ぬのしだランチIN布小」、毎月一回の「ぬのしだランチINふれセン」、そして高

子ども食堂の様子

齢者対象の「オレンジサロン石渕」、認知症の正しい理解と予防を目的に「ぬのしだオレンジカフェ」をそれぞれ開催しています。子ども食堂やサロンは食材の調達から準備、調理、片付けまで大変ですが、ボランティアで手伝ってくれるスタッフに恵まれ「しんどいけど楽しいねえ。」と笑い合いながら続けています。

又「オレンジカフェ」も「来月は何をしよう。」と手芸やゲーム等を考えることが自分の頭の体操、認知症予防になっているのかなと思いつつ、高齢の方々と冗談を言いながら、笑顔溢れる場の提供をしています。

そろそろ後継者をと考えますが、こればっかりは自分の思うようにはいきません。一緒に活動をしてくれている人の中で、私が出来なくなった時「仕方ない。私がやっちゃお。」と言ってくれる人がきっと現れるでしょう。

先のことをあれこれ心配するより、今を精一杯楽しもうと思います。「なるようになるさ！」

## 「高知丸の内高校同窓の集い」について

副会長　丸17回生　**中村　光一**

令和四年十二月十七日（土）高知会館において、「高知丸の内高校同窓の集い」が、三年ぶりに開催されました。例年開催されます同窓会は、総会終了後、懇親会を実施しておりましたが、今回はコロナの感染対応として、総会については理事の皆様に事前に文書決議の形をとり、当日の懇親会だけを行いました。名称も「高知丸の内高校同窓会・懇親会」を「高知丸の内高校同窓の集い」といたしました。

理事会等での話の中で、二年間未開催でもあり、これ以上の延期はこれからの活動に支障が出るのではないか、今回はなんとしてでも実施したいとの意見も出され、コロナ感染対応も行いながら、開催する運びとなりました。

当初の申込者は七十名の予定でしたが、コロナの感染拡大と重なり、五十九名の参加となりました。皆様久しぶりの同窓会で、参加条件の悪い中無理を押しての参加ではなかったかと思われますが、全国各地から、また遠路はるばるシンガポール（現地在住）からも、ご参加いただき盛り上げていただきました。ご参加いただいた皆様や関係者には厚く御礼申し上げます。

集いは戸田会長（丸11回生）の挨拶で始まりました。今回の開催については、コロナ感染の終息が見えない中、二年間開催できなかったことを踏まえ、なんとしても今年度は実施したい。その中で同窓会の大きな目的の一つである、卒業年度を超えた形で、昨今薄くなりつつあるつながりやきずなの大切さが共有される同窓会が、集う会にしたいとの強い思いが述べられました。

次に高知丸の内高校谷村校長より、学校紹介が行われ、学校経営の理念や考え方、ドリームカムトゥルー（生徒・教員・保護者・同窓会の四者合同の学校教育活動の評価）による教育活動の具体的な話、卒業生の進路等について、情熱あふれる心のこもった説明をいただきました。

続いて吉村宏関東支部長（丸５回生）から「関東支部でも開催を願い延期してでも実施しようと試みたが、コロナの七波に飲み込まれ、中止にせざるを得なかった」と、苦しい胸の内を語られました。また「本日の集いに参加し、嬉しく思います」との過分なご挨拶をいただき、あわせて乾杯のご発声もいただきました。本年度は総会が、関西・関東支部で盛大に開催されることを衷心より祈念したいと思います。

引き続き、会場の使用時間制約の中、昼食をとりながらのコンサートとなりました。

ウインターコンサートと題して、丸の内高校音楽科長を始め三名と同窓生理事二名の協力を得て、ソロ・連弾でクリスマスピアノメドレーとクラシックピアノメドレーを、さらに童謡ステージとして「早春賦」「荒城の月」などを独唱で、演歌ステージとして「津軽海峡冬景色」「天城越え」などなじみのある歌を熱唱していただきました。

「高知丸の内高校校歌」を合唱しました。皆様がその当時に帰られたようで、大いに盛り上がりました。出演いただいた皆様には、参加者に寄

り添う形の内容を考えていただき、全員が参加でき心より癒やされるコンサートになりましたことに、改めてお礼を申し上げます。

第二部は小笠原泰英さん（丸17回生）によるすばらしい詩吟を詠じていただきました。令和四年度の広報「公孫樹32号」で、ご本人の詩吟の活動歴について述べられておりますが、長い年月をかけて培われた地道な努力の成果を、披露していただきました。〝継続は力なり〟とよく言われますが、趣味を持たないものとしては、うらやましい限りです。これからも益々精進されることを祈念いたします。

また今回はお楽しみの一つとして、空くじなしの抽選会を行いました。景品については有志の皆様から多種多様な品物を提供いただきました。開けるまでのお楽しみでの景品でしたので、何が入っているか判らず皆様に愉しんでいただけたのではないでしょうか。景品を提供していただきました皆様には、改めてお礼を申し上げます。

さて早いもので、十二時に始まった集いも十五時三十分となり、名残惜しい中で閉会の挨拶を、福井和子さん（丸８回生）が行いました。シンガポールから来られた中島勲さん（丸８回生）の紹介やお礼の挨拶等があり、次回の再会を願い閉会となりました。

## ミニコンサートを終えて

丸63回生　**小島　彩**

令和四年十二月十七日（土）高知会館での「高知丸の内高校同窓の集い」に昨年初めて参加させていただきました。

「音楽科卒業生で何かステージを企画していただけませんか」との依頼を受け、同窓会員である私と秦泉寺彩乃さんとコンサートの内容を考えました。私たちは同級生であり、在学中は共にピアノや合唱に頑張ってきた仲間です。打ち合わせで久しぶりに丸の内高校に足を踏み入れた私達は一気に高校生時代に戻った気分。そのまま音楽館へ向かいました。「先生お久しぶりです」と、職員室をノックしました。

音楽科に本年度も在籍されている西岡利恵科長は、私達が学生だった頃も科長として、ご教授いただきました。また、私たちの一期先輩である氏次礼先生も教諭として赴任されていました。西岡先生と氏次先生とお会いし、懐かしい空気が流れました。

「先生達も一緒にミニコンサートしませんか？」秦泉寺さんがすかさず尋ねました。私は内心「大丈夫かな…」なんて思っていました。しかし、返ってきた西岡科長の言葉は、「よっし、やろうやろう！」。西岡科長のフットワークの軽さは当時と何ら変わりなく、音楽科のＰＲのためなら何でも協力していただける頼もしい先生でした。ブギウギピアニストとして活躍されている、音楽科の濵田淳介先生も交えて、ミニコンサートを行う事になりました。

コンサートの演目は、毎年音楽科定期演奏会のオープニングで歌われている合唱曲「これが音楽」に始まり、濵田先生のブギウギピアノでのクリスマスメドレー。氏次先生と秦泉寺さんでの連弾でクラシックメドレー。ピアノ伴奏と歌唱での童謡ステージでは浜千鳥・早春賦・荒城の月・北風小僧の寒太郎・月の砂漠・赤とんぼ・雪を披露しました。リクエストのあった演歌ステージでは、北酒場・津軽海峡冬景色・天城越え・舟歌を歌い大変盛り上がりました。

秦泉寺さんは学生時代から「歌って走ってキャラバンバン」や「ＮＨＫのど自慢」などに出演するなど、歌が大変上手です。演奏者五名は全員

ピアノ専攻のため、グランドピアノの無い場所でステージを作り上げるには少し困難さもありましたが、色々なステージパフォーマンスも交えながら楽しいステージを作り上げる事ができたのではないかと思っています。参加された皆様の楽しそうな笑顔や、手拍子や拍手に応援されながら、私達一同も大変良い時間を過ごさせていただきました。最後には丸の内高校の校歌を会場にいる皆様と共に歌いコンサートを締めくくりました。白鳳の間いっぱいに同窓生の歌声が響き渡りました。

## 関東支部

### 関東同窓会での〝話題〟

## 「朝ドラ・らんまん」人気に便乗して

丸８回生　**田中　公夫**（神奈川県在住）

当日、五月二十一日は、はからずもＧ７サミットへのウクライナの大統領の参加を含め、途上八カ国などによる原爆記念碑の礼拝など〝記念すべき重要会議と諸会合の歴史的最終日〟と重なったことです。まさに、牧野博士の名言『雑草という種類の草木なし』に加え、博士が『植物を愛せば、世界中から争いがなくなる』と託宣した希望の日となるか!?　期待したくなる特別な日となりました。

今や、生物多様性や地球環境問題などは世界的な喫緊テーマでもあり、ＮＨＫＧＴＶ・朝ドラを契機に様々な番組で取り上げられるだけでなく、各地の博物館や植物園でも関連の企画展示が行われ、とりわけ地元高知でも地域おこしを兼ねた様々な企画イベントなどが展開されていると伝え聞き、期待大です。

故郷の偉人の今日的意義など〝深入りのキッカケ〟となったのは、昨年の暮れ、同窓の畏友：谷是さん（９回生）から恒例の年賀色紙を頂いたお礼へのゲラ刷りでした。『らんまんの笑顔「人間・牧野富太郎」伝：この男、天才学者か借金王か!?　怒涛のエピソードで綴る「世界のマキノ」94年の生涯』そして語り下ろし＝谷氏、書留＝谷村氏、と付記。『土佐史談会のレジェンド・谷氏による講演を盟友の谷村さんが書留めた名物の講談風伝記』であり、そして版元が彼の小学校からの同級生で哲学者カントの名著「永遠平和のために」の新訳本などの名編集長して活躍された出版社だと気づき!!即、書店に注文した次第です。

◆私ども同窓会の関東在住者にとっても富太郎の少年時代の友人につながる縁など「地縁、血縁、同窓・友人縁」多々です。私自身にとっても、小学校時代の同級生との縁で、牧野の実家・岸屋を継承した佐川町の酒造メーカーの酒蔵見学や、中高時代に遠足で行った横倉山、大樽の滝、青山文庫、そして佐川高校長だった伯父の実家の庭に植えてあった「佐川町の花：サカワサイシン」の記憶など、ひと際、身近な記憶です。

特に、母校・県立丸の内高校にとっての縁の深い牧野富太郎博士の業績を挙げると、

＊校祖とも云える植木枝盛とほぼ同時代に自由民権運動に賛同、同盟会・公正社の立ち上げに係わったことです。（しかし、暫くして魑魅魍魎（ちみもうりょう）の政治には離別宣言、退会し、植物学に専念することに…。）

＊母校の音楽科との関連で言えば、西洋音楽普及のための高知西洋音楽会の立ち上げに参加し、オルガンを購入、小学校へ寄贈。自らも独学で演奏もしたこと。

＊そして、彼の勉学心得『赭鞭（しゃべん）一達』にある「博く交（まじわり）を同志に結ぶ可し」は、いみじくも同窓の友人などとの交流の大事さをモットーとすべき、としていることも流石（さすが）の名言だと思

います。

＊故郷の関係者として、この際お勧めは、都内練馬区立牧野富太郎庭園＆記念館と、帰郷の際には是非高知県立牧野植物園と高知市立自由民権記念館の見学です。お墓参りなら、牧野富太郎ご夫妻の墓＝天王寺墓地（ＪＲ日暮里駅徒歩三分）、植木枝盛の墓＝都立青山霊園（東京メトロ外苑前駅or乃木坂駅徒歩十分）が都心に近く、交通至便《お勧めです》。

◆目下、牧野博士ものに夢中なのは、富太郎が植物にのめり込み、挙げ句、実家の破産と大借金苦に悩んだとの逸話は定説として納得ですが、しかし多分、ドラマ化されないだろう秘話として、富太郎の才と熱意を評価し大学研究室への出入りを許した恩人の教授が大学の同種出版企画との扱いに悩み、富太郎の大学資料の扱いでもチョンボらしいことも重なり、出入り禁止とした数年の後、湘南の海で自死した経緯や、実家「岸屋」の破産処理をした後、許嫁の従妹の楢（綾）は縁のある番頭と結婚し、苦労した挙句、静岡の鮪漁の網元として成功した等々。この種の富太郎らしい逸話は多々ですが、敢えて割愛します。

今回改めて思うのは、《富太郎は、むしろ実家の商人魂を受け継ぎ【世界中の植物相の調査・研究、編集・出版、育種事業展開、マスコミ活用等々の総合会社の起業家】としての検討と試行かも、と思われる逸話が垣間見える…》のです。不遜ですが〔新説〕を提唱したくなってしまいました。

◆ここで、ドラマは東京編の幕開け！あっという間に、三年ぶりの関東総会も過ぎ、朝ドラも東京編に入り、久しぶりの高視聴率は植物や環境問題から生態系に関する関連番組や各地での植物園や博物館での関連展示などを惹起し、全国的に一種の〝ボタニカ・ブーム〟となって嬉しい限りです。

＊私の第二の故郷・相模原でも、今月末（七月二十二日）には近隣の公民館で「牧野博士の業績と相模原の植物」と題して、講演会が開催。何と講師は〝学芸員の開祖というべき牧野博士の現代の後継者〟と言いたい全国的に高名で私達の地域の自然保護団体の相談＆指導役でもある秋山学芸員。従来から縁のある私は事前に博物館へ。博士由来の地酒「花と恋して」を手土産にイツモの偏執鳥ならぬ〝俄か牧野ネタ偏執調〟の数時間。

本番当日、何と冒頭、博士の人物評について『土佐弁でイゴッソウ、小悪魔的とも云われるが、今日は高知の地元出身の田中さんが出席なので、ご説明願います』…。

ビックリ！＆タジタジ!!　同伴の北陸出身の鳥友は、ウンウン＆ニヤニヤ!?　時に失笑…。やっと挽回できたのは、休憩時間での標本を取り囲んでの植物談義の時。テーブルには牧野博士由来の相模原で見られる植物標本六種…。一番目には、何と大きな葉っぱが目立った「ヨコグラノキ」が。すかさず『この葉っぱこそ、故郷・高知で富太郎が地元・横倉山で発見、命名したものです』と、声高に追言してしまいました。その隣には、「ハキダメギク」…。それにしても名前が掃溜めとは、これも地元高知産か!?と、こっそりスマホで検索。『これは博士が世田谷の在で見つけ、命名したもの』とあり、〝ホッ!!、頬被り＆素通り〟です。

◆そして、博士の名言「雑草という種の植物はない」《遂に見つけた私の、〝余談＆余後のテーマ!?〟これからの雑学・雑草魂の人生願望や如何です!!》

このところ書店めぐりをしていると「牧野らんまん本や植物学や生態学に関係する書籍や雑誌特集」が多く、目移りします。そこで見つけたのが「雑草が教えてくれた日本文化史～したたかな民族性の由来」（二〇一七、一〇、一）著：稲垣栄洋　静岡大大学院教授　専攻：雑草生態学　を即入手。

＊論旨は【日本には植物の分類学はない】として、中国から伝来の本草学に準拠し「もっぱら利用の観点」から分類と説明。近代に至っては西欧による科学的分類により「他の個体群と交配しない生殖的隔離機構があること」で区別し、形態や生態に地域的特徴などがある場合には種の下に「亜種」を設けている、と敷衍。

そして、植物では種間交雑や種子を作らず栄養繁殖するものもあり、タンポポとアサガオなど未だに明確になっていないものもある、とか。人間の頭で理解しやすいよう区別して整理しようとしているだけと説明。

《〝門外漢のいちバードウォチャーにすぎない小生〟》が通読する限り、著者の説は日本の自然環境と農林業をベースとした従来の植物相固有の分類であり、グローバルで多用な生態と品種改良など将来に渉っての分類には無理では…!?》と思うと同時に、《湿地や水田などの効用を含めた雑草生態学や日本人論としては新しい指摘も多く、有益か…》と期待しますが、目下の懸念「植物の分類学についての異論・対応具体説」には無縁であり、防除防疫を目的とした雑草生態学でのアレコレに過ぎないのでは、と素人ながらの〝早とちり〟かも、と思ったり…!?

しかし、それはそれとして、この半年楽しませていただいたドラマ

チックな「朝ドラ」と〝ネタ噺（ばなし）〟の後は、猛暑を避け、冷やした〝マキノジン〟ともども〝雑草が教える日本人論、日本文化史〟を楽しみたいと念ずる〝土佐のイゴウソウ〟です。

丸15回　福井　秀三
（印西市在住）

三十年近く在住している千葉県印西（いんざい）市は、利根川、印旛沼、手賀沼に囲まれた北総地域に位置しています。田畑や里山も多い丘陵地ですが、最近は大規模なデータセンター（DC）が集う「情報城下町」として知られるようになり、グーグルのDCも二〇二三年四月に開設されました。

地盤が強固で活断層がないこと、海底ケーブルの陸揚げ局が南房総にあることなどがDC好適地に選ばれた理由らしく、結果的に市の財政力がディズニーランドのある浦安市や空港のある成田市と肩を並べるほどになっています。

DCは小窓が点在するだけの無機的な箱状の外観を有していますが、重要な情報インフラであることは間違いなく、例えば、外国在住の娘の近況が把握できているのは紛れもなくDCを経由した情報提供のおかげです。これからはDCに対して「我々の日常にこじゃんと役に立ちゆうぜよ」という認識をもとうと改めて思っています。

話は変わりますが、テレビ小説「らんまん」の主人公のモデルである牧野富太郎は、一九五七年に九十四歳で亡くなる直前まで活動していたそうですが、旺盛な探求心、野山を駆け回ったことによる豊富な運動量の蓄積、肉食を好んだ食生活などがその源かもしれません。

今年の誕生日で七十八歳になる身ですが、偉大な土佐の先人とは大違いで、今になって種々のことについての無知に気付く有様です。今更頭の悪さを嘆いても始まらないので、せめて健康寿命だけはあと少し延ばせればと願っています。

健康寿命を延ばすための一手段と考えられる運動についてですが、二十歳代に空手をかじった関係で、五十歳を過ぎたあたりで再開して現在に至っています。再開時期は遅かったのですが、歳月の流れは早く、そのころ練習に来ていた児童が教員として戻ってきて、母校の中・高生の部員を指導しています。

稽古には今も週二回程度参加して汗を流しています。ステップ動作を伴う組手練習では、膝に強い衝撃が繰り返し加えられますが、有難いことに今のところ支障は生じていません。老体故に過信は禁物ですが、経済的負担ゼロで運動の機会が得られ、また大会等の催しを通じて人的交流も図れることから、体力のある間は続けようと思っています。

## 忘れられない友

丸17回生　太田　節子
（神奈川県在住）

今年五月下旬、朝ドラの土佐弁に誘われて、久しぶりに帰高した。所用が終わった二日後、私は一人で、思い出深いお城に登り、その周辺を歩いた。

高校時代、行きも帰りも裏門を利用した。お堀に架かる橋を渡り、板垣退助像をいつも目にしていた。急ぐ朝も、友との帰校の折の散策の時も。お城は、私たちにとって特別な場所だった。

退助の傍によって、右手を挙げて「自由は死せず」といいながら、後方を見ると大きな栴檀（せんだん）の木があった。全く覚えていなかったが、関東に住む私にとって、栴檀の木は懐かしく、特別な木の一つ。ああと声が出た。

どうしても行きたい所へとお城を出て、お堀の橋の方へ向かった。ここは、五十年以上前は、四季折々の花園があったが、今は芝生公園だ。橋も新しい。そして誰かの像があったはず。ある。あった。あそこだ。大手門が望める端のほうに像があった。そう、ここだ。由美さんと一緒に過ごした時間が蘇る。遠い記憶が鮮やかになる。

高一・高二の冬休みは、郵便局で年賀状の仕分のアルバイトをした。元旦も休めなかった。昼食時に抜け

株式会社 高知新聞総合印刷
〒781-8121 高知市葛島一丁目10-70
TEL(088)882-5521　FAX(088)882-5522

出して、誰の像か気にすることもなく、この像の前で弁当を広げた。寒かったとか、弁当が冷たかったとか、そんな記憶は全くない。真冬の陽射しが温かかった。二人で話しているだけで、楽しかった。

中学校・高校では、映画や塾に行くのもずっと一緒だった。休みになれば、家は近いわけではなかったが、互いの家を行き来し、本や詩を交換した。何でも話し合った。

結婚して彼女は岐阜へ。私は神奈川へ。離れても変わらぬ交流があった。そんな彼女が十数年前、突然亡くなった。二日前に電話で話したばかりだったのに。ショックだった。悲しすぎた。あの時会っておけばと、悔やんだ。お墓参りにも行ってないのだ。

シャンソンを歌う太田さん

今回は、どうしても、その思い出の像の前に来たかったのだ。ここで、由美さんに語りかけるしかなかった。「吉田茂の像だって知っていた？」「知らなかった」「私もよ」ときっと二人で笑い合うだろう。人も故郷も何もかも変わっていくが、彼女は私の中に今も生きている。これから、帰高する度に、丸の内高の裏門に行き、また、この像の前に来るからと、由美さんに誓った。吉田先生笑わないで。

**父母もなく親友もなしふるさとの**
**生姜の形（なり）に手を這わせゐる**

節子

## お会いしたかった

丸26回生　**植松美壽惠**
（旧姓：墨田）

脳性小児まひで長女を亡くした母は、七カ月の私を背負い、鉄道自殺を図りました。待てども待てども列車は来ません。最終列車が行った後でした。

命拾いしたその後の私は「生かしてもらえて有り難い！」と思う場面が多々ありましたが、武政美久さん（63回生）の美しい歌声を聴いた時、心が震え、有り難いと思えた瞬間でした。

その関東地区の同窓会は、四年ぶりに本年五月、原宿のクラブ水交にて三十六名の参加で開かれ、私は司会を担当させていただきました。

高知からは、体育大会の関係でお忙しい校長先生に代わり、教頭の原先生、同窓会本部長の戸田様、事務局長の中内様、東京からはゲストとして高知追手前高校校友会の方々がお越しくださいました。

関東地区の心を繋ぐ『土佐音頭』の全員合唱から開会。次の吉村会長（5回生）のご挨拶に「残念ながらこの間にお亡くなりになった方も…。」の言葉がありました。会長にとっても辛いお別れがあったようですが、私は「世話人・世話役の横川さん（12回生）」が思い浮かびました。会長の「しばてん踊りが気になる。」の発言で、「次回は藤村さん（6回生）と横川さんの演奏で、しばてん踊りをやりましょう。」「じゃあ楽譜を送ってよ。」「では、楽譜を探して送ります。」の会話が最後となりました。同窓会での、長い期間のお世話に改めて感謝いたします。

そして、教頭先生からの在学生の多方面にわたる活躍話を、嬉しく拝聴。私が泳いだあの鏡川で、今やカヌー部が練習しているとか…。

日和崎さん（8回生）の乾杯の音頭とともに、会えなかった長い期間を一気に取り戻すかのように、賑やかな雰囲気になりました。

会は心穏やかになる藤村さんのギター演奏、太田さん（17回生）の変わらない素敵な歌声、田中さん（8回生）の牧野富太郎話へと続きます。

ギターを弾く藤村さん

ちなみに私の遠足は牧野植物園、子や孫たちは練馬区内の牧野記念庭園。今年のねりま推しの一つは、牧野博士。田中さんのお話は、その朝ドラや小さい時から博士のことをそれとなく聞き知っていたこと以外の内容が盛り沢山。地元に戻って家族や友人に自慢げに話しました。

後半は日和崎さんより、ミラノでオペラ修行中の野町知弘さん（61回生）の様子を聞き、この先の活躍を願うばかりでした。また柳本さん（18回生）からは、一、十、百、千、万の数に絡ませて、健康維持のヒントをいただきました。校歌斉唱の、千谷さん（25回生）の指揮は、「私、唄うまい！」と思わせるようなリード。そして記念写真、閉会となりました。

ひさしぶりの歓談

この会の準備には、会長と松岡さん（18回生）はじめ年齢差五十歳以上のメンバーが一丸となりました。しかし、会場の都合で、途中から音量の絞りがあったり、私の不手際があったりと、次会に意欲を燃やす課題がありました。拙い司会にご協力を有り難うございました。

ずっと私は皆様にお会いしたかった！　初めての方も含めて、高知丸の内高校が繋ぐ皆様とのご縁に、力が湧きました。生かしてもらえてよかったと思える出来事が、また一つ増えました。

＊「らんまん」関係配布資料
・ＮＨＫ朝ドラ「らんまん」キャスト等相関図
・牧野富太郎「略式年譜」
・富太郎「勉強心得・長寿八訓」
・高知県発行「とさぶし42号：まきのさんだいすき」
・練馬区立「牧野記念庭園パンフレット」、他

## いろいろなことへの挑戦

丸63回生　**武政　美久**

丸の内高音楽科を卒業し、昭和音楽大学ポピュラーヴォーカルコースを卒業。その後同大学で声楽研究生を修了しました。

音楽の中にある「ジャンル」というものにとらわれず、誰もが気軽に楽しめるパフォーマンスができるよう、練習・勉強の毎日です。

高校まではクラシックの歌い方をメインに練習してきましたが、大学に入ってからはロック・洋楽の勉強がメインになり、声の出し方の違いに戸惑うこともありました。

正直、自分の歌のジャンルを突然変えたので大学在学中に理解できなかったことは多く、理解したことが技術に結びついてきたのは卒業後でしたが、無事こうして自分の活動に活かすことができています。

卒業後は、高知・東京・神奈川を中心に活動をしており、高知では「ラ・ラ・ラ春祭り」や、地元の佐川町のロビーコンサートに出演しています。帰省の期間が大体一週間程なので、この短い時間の中で家族との時間を大事にしたり、実家の農業や家事を手伝いながら、演奏の準備や進行用の台本を作ったりしています。関東では就労者支援施設への訪問演奏や不定期の路上ライブで演奏を行ったり、その他にもＹｏｕｔｕｂｅにて…演奏動画の投稿や、十月の神奈川でのミュージカルライブに出演するため筋トレにも励んでいます。

演奏の仕事や稽古がない日は、動画撮影や編集、イラストやアニメーションの制作、レコーディング等々…

息子(うさぎ)のお世話もしながら忙しい毎日を送っています。

歌・リコーダー・イラスト・作詞作曲・舞台活動…といろんなことに手を出しすぎて、何をやってる人か分からないと言われることもありますが、アーティスト？何でも屋？一個のことでも沢山のことでも、何かができればどこかに繋がるし、今までもそうして生きてきたし、実際素敵なご縁でこうして公孫樹に投稿する機会にも恵まれました。ありがとうございます。これからも、無理せず自分らしく頑張ります。

## 関西支部

### ●金婚を迎えて
### ＜わが嫁さんに感謝する＞●

（前号の続き）

丸６回生　**坂本　融二**

**【慶応大学で会計学研修】**

昭和四十三年（一九六八年）四月、「慶応大学で一年間勉強して来い」との命で、東京に出てきた。

昭和三十四年法政大学を卒業して以来、九年振りの東京。ここから嫁さんにとって更なる苦労の始まりになったかも知れない。適当な借家が見つからず（田舎から来た一尉には官舎はなかった）、取り敢えず家財道具を高知に送って、親子三人を実家で過ごさせた。私は一人、学生時代の下宿のおばさんに頼んで、九品仏のソバ屋の二階に下宿して、慶応大学に出掛けた。

昭和四十三年は学生運動が過激で、慶応大学の教室にも、覆面の男女が授業の妨害に現れた。夏休み中、小平市に借家を見つけ、四カ月振りに家族が一緒に生活できるようになった。あまりの住宅難で、公団住宅の売り出しに応募。東京の小金井、千葉の検見川、横浜の二俣川、全て当選したが、頭金五十万円が無くてキャンセル。半年後に価格が倍になった。

**【引越貧乏・子育て】**

結婚してから長距離の引越を十二回、近距離移動を二回した。昭和三十九（一九六四）年四月遠軽～高知～東京小平～仙台～東京練馬～札幌～伊丹～東京三宿～伊丹～東京杉並～京都宇治～東京杉並～伊丹。平成四（一九九二）年四月、定年五十五歳。

幹部は、一度は北海道勤務を、調達の仕事をする者には、三年以内に勤務替えをした。引越は国鉄のコンテナーでピアノも自転車も混載。不必要な物はどんどん捨てて、また必要の都度買わざるを得なかった。引越が終わると次の引越のために、段ボール箱をタンスの裏に保管。長女は小学校三回、中学校三回。次女は小学校四回、中学校二回の転校。転居先がいずれも都会で、レベルも高かったので、教科書・学年の進度・友達付き合い等に苦労したことと思う。転校・転入の手続き・編入試験等全てを嫁さんにかぶせてしまった。仙台と札幌での生活には、家族にとって四季の観光や蔵王への日帰りスキー、島松野原でのスズラン狩り・手稲山でのスキー教室等楽しいこともあった。

**【東京貧乏・母子家庭】**

昭和四十五年七月から五十年三月、仙台に転勤になるまでの六本木時代、防衛庁陸上幕僚監部会計課勤務の四年八カ月は多忙な時期だった。仕事は全国会計職域に勤務する隊員・事務官約三千名の人事（異動・昇任・試験・入校等）に関すること、会計課長の秘書室的任務も付加されていた。昭和四十六年には英語を半年勉強して来い、四十七年九月から十二月テキサスへ、ホークミサイル部隊の射撃訓練に会計幹部として出張を命じられ、四十八年イリノイ州インディアナポリスの米陸軍会計学校に留学、帰国後は本来の仕事一年分。家族と共に生活する暇もなかった。二回のアメリカ出張は一＄＝三百六十円の時代であり薄給の身にとって出発の準備や滞在間の出費には、嫁さんに苦労をかけた。丁度この頃長女が幼稚園・小学校、次女も幼稚園へ行き始めた。子供のことは一切嫁さん任せ。夜中に帰宅し早朝の出勤で、「お父さんいるの？」等と長女に言わせていた。嫁さんにとっては、羽田空港への見送り・出迎えは、「東京貧乏」の象徴であり、住まいの近くで子供を連れてショッピングするぐらいで、東京はどこにも

松岡蒲鉾店
高知市帯屋町2丁目4～3(公設市場)
TEL 088-872-3916

行ったことがない「母子家庭」にしてしまった。

【六本木で出会った友人】

東京六本木での勤務は延べ十年半になりますが、出たり入ったりで、落ち着いて友人と会うことはありませんでした。昭和四十七年頃残業して地下鉄「六本木駅」の終電に乗ろうとした時、H君がその終電から降りてくるのに出会ったことがあります。「何をしに来たんだろう。ああ仕事か。皆頑張ってるんだ。」と、思ったことでした。

藤村俊一郎君と畠山樟樹君が、心配して訪ねて来てくれました。六本木の正門には、全国の連隊から交代で歩哨がついており、なかなか入りにくかったと思います。会計課長の頃、橋詰（鍋島）利和君が来てくれました。東京大学での友人が「防衛庁に入って、何をしているんだろう。」と。その頃内部部局の装備局長をしていました。小中高と一緒だった橋詰君は、一流銀行の横浜支店長をしていました。早くに亡くなりました。

【伊丹にマンション購入・単身赴任】

昭和五十六年長女が高校に入学した。〝高校だけは転校したくない〟との長女の希望で、JR伊丹駅のすぐそばの新築マンションを買った。マンションは平成十七年四月二十五日午前九時二十分に快速脱線事故現場のすぐ近くです。購入した頃の福知山線は単線・気動車、一時間に二本のローカル線だった。その後複線となり、電化され快速電車が走るようになった。昭和五十七年七月、私は単身で六本木（陸幕会計課会計監査班長）に赴任した。大阪駅へ十四分。宝塚線とも愛称されていた。大阪国際空港に市バスで二十分。高知の両親に何かあっても飛んでいける距離。六本木勤務もその日の朝の新幹線で、時差出勤の場合は出勤できる。その後東京・宇治・東京勤務になった五年間、嫁さんは私に同行し、娘には自分達二人で伊丹の生活をさせ、親離れを促したことになり、私達にとっても子離れが出来たと思っている。娘二人は数多くの転校に耐え、自立することで強い娘になったと思っている。長女は私共夫婦が東京杉並に居るとき彼氏を連れて来、次女は阪神淡路大地震の時彼氏を連れて来た。アメリカの青年だった。現在は宝塚市とオレゴン州ポートランドで、それぞれ孫二人と元気に暮らしている。

【高知大津実家の大洪水】

平成十年九月二十四日、朝七時のNHKニュース「大洪水の高知」、見たことのある風景が…。〝ここは大津だ！〟と直感した。実家に電話を掛けたが応答がない。午後一時十分、八十四歳の母から電話が来た。公衆から掛けていると。「昨夜八時から〝お江戸でござる〟を見ていたら、急に絨毯が浮き上がった。二階に上がる暇もなかった。浮いた絨毯の上で、八十八歳のお父さんと朝水が引くまでじっとしていた。実家にはブレーカがなかったが電気は点いていた。朝水が引いて、床下の仏壇・位牌を拾っていた父の具合が悪くなり、日赤に入院した」と。事後岡豊の嫁さんの実家に泊まって、復旧に努めた。十一月、父は高知城東病院に転院した。母は医師からの勧めがあり十二月に入院した。以来十六年間高知に通い続けた。私達夫婦が延べ百九十九回、弟夫婦が百二十九回になる。平成十四年二月に実父、十六年に義父が他界した。入院していた母も百歳の紀寿を迎え、総理大臣から長寿を祝う銀杯を賜り、平成二十六年十二月に他界した。

【瑞宝小綬章の受章】

平成二十（二〇〇八）年秋の叙勲で、防衛功労（元陸上自衛隊中央会計隊長）の瑞宝小綬章を受章した。

高橋（生方）栄さんから高知新聞に載った晴れの受章者高知県関連四十六人の記事が届いた。生方さん、有り難う。高知県から離れているのに、紹介してくれて感激でした。タブチ幼稚園から中学校まで一緒だった溝渕栄一郎君が地方自治功労で受章されていた。丸の内高6回生（前副会長）飯田正さんは、春に受章されていた。おめでとうございます。

十一月三日、防衛大臣から伝達式招待状が送られて来た。十一月六日東京へ移動、椿山荘泊。七日防衛省で大臣から勲記勲章の伝達、椿山荘で陸幕長の招宴、十四時五十分から皇居豊明殿の間で天皇陛下に拝謁・記念撮影があった。天皇陛下は、受章者と奥さん方に親しく近づいて来られ、ゆっくりとお祝いの言葉・ねぎらいの言葉を掛けながら歩かれた。日本国天皇が坂本融二に瑞宝小綬章を授与する璽を押してくださったものだった。人生一度の晴れ舞台、大きなエポックでありました。七十歳を過ぎて、夫婦共に健康で臨めることの喜びを体感しました。

翌日六本木ヒルズ展望室から東京を、そして旧防衛庁の変容した「東京ミッドタウンを」を眺め、帰路に。

【金婚の祝い】

平成二十五（二〇一三）年に喜寿を祝うことが出来、二十六年に金婚式を迎えることが出来たことは、感謝すべきことです。支えてくれた嫁さん、二人の娘達に感謝です。本当に有り難う。

## 國松さんの出版記念

國松勝さんの画集出版を祝う会が、十一月二十七日（日）城西館に於いて、百二十余名の参加の下盛大に挙行されました。美術家協会の会員、デザイン・印刷に関わった方々、丸の内高校の同窓生、教職の職場の友人、労連の方等、沢山の方々から祝福の言葉や励ましの言葉が贈られました。

祝辞を受け、國松さんから現在の体の状況について触れられ、出版に至った経緯が述べられました。

「今、癌の第3ステージにあり、放射線治療と抗がん治療を受け、副作用との戦いが続いています。……しかし今おかれている状況から、今やっておきたいと考え、弘文印刷の協力を得て、皆様に披露する機会がもてたことを嬉しく思います。たくさんの方々にご参加いただき、激励を受けたことは、何より今後の励みになりました。本日は本当に有り難うございました。

皆様のご協力や励ましがあって、今日があったのです」と。

学校と同窓会に『國松勝作品集』を寄贈いただき、有り難うございました。

（文責：明坂）

## 同窓二人が表彰される

今年度の県出版文化賞に、松崎淳子さん（第一高女54回生）、出版文化賞に國松勝さん（丸８回生）が表彰される。

**2023（令和５）年２月3日付朝刊 ▼**

（高知新聞社より掲載許可済）

### 椋庵文学賞・県出版文化賞決まる

## 山沖さん（黒潮町）ダブル受賞

第56回椋庵文学賞、第67回県出版文化賞の受賞作が2日発表され、山沖素子さん（70）＝黒潮町出口＝のエッセー集「風へV」がダブル受賞を果たした。出版文化賞にはほかに、高知県立大学名誉教授の松崎淳子さん（96）＝高知市丸尾田＝のエッセー集「まっことめでたい96歳」など3点が選ばれた。

県内在住者の優れた文学作品に贈られる椋庵文学賞（同賞財団主催）には、昨年発表の自薦他薦を含む13点（散文11点、詩歌2点）が寄せられ、米沢朝子・高知ペンクラブ副会長ら選考委員7人が審査した。

山沖さんは元小学校教員。「風へV」（ふたば工房）は、1997年に大阪雲校文学賞一般・随筆の部で入賞したのをきっかけに、50歳から5年おきに刊行しているシリーズの5冊目。退職後の日常を軽やかな言葉でつづっており、選考委員から「読んでいるうちに作者の世界に包まれていった」と高く評価された。

詩誌「SPACE」に発表した96編を収録。そのうちの1編「やわらかに風を編む」の中で山沖さんは、「私」の日常を書く作業について（思いが形に成るとき、書くことを支えてくれた人の顔が浮かぶ）と表現（見えないけれど存るもの／過ぎゆき忘れ去られるもの／風のような断片を／やわらかに編む／つながれた模様／ゆらゆらと笑う）と詩のような言葉で締めくくっている。

主催者によると県出版文化賞との同時受賞は前例がなく、山沖さんは「見通いのように書き続けてきた自然な語りが認められたのは本当にうれしい」と喜んだ。

県出版文化賞（県文教協会主催）は昨年発行の出版物が対象。応募のあった12点の中から、千浦孝雄・元高知市民図書館長ら選考委員5人が審査に当たった。

松崎さんの「まっことめでたい96歳」（飛鳥出版室）は、前戦後の体験や土佐の食文化について、長年ノートに書きためていたもの。洋画家の国松勝さん84＝同市桜馬場＝の「國松勝作品集」（弘文印刷）は、ライフワークである日曜市や土佐の民家を描いた約70点を収載する。高知大学名誉教授の上野智子さん（70）＝同市高須＝の資料集「対訳 妻・鶴あて書簡 瑞山のことば」（高知新聞総合印刷）は幕末の志士、武市半太が家族に宛てた手紙を現代語訳し、その中で使われる江戸時代の土佐弁について解説した。

第42回寺田寅彦記念賞（同協会主催）は応募がなかった。

授賞式は23日午前10時から、高知市本町5丁目の高知会館で行われる。（梅溝慶太）

椋庵文学賞と県出版文化賞をダブル受賞した山沖素子さん（高知市本町４丁目の県民文化ホール）

### 文化賞 ほかに３点 寺田賞応募なし

県出版文化賞の受賞作品

## 単独チームとして県大会へ出場

昨年までいくつかの高校とチームを組み、連合チームで県大会に出場していたが、今年は7年ぶりに丸の内高校単独で出場。

# 追手前 中盤集中打

## 丸の内 反撃の波つくれず

丸の内 0000000 0
追手前 10004 5×10
（六回コールド）

▽1回戦
▽二塁打 立花▽犠打 丸0、追3（筒井2、山辺）▽盗塁 丸0、追4（渡辺、広松、立花、山辺）▽失策 丸3（武林、部府、中田郷）追2（角原2）▽併殺 丸0、追1（角原―山辺―中川）▽暴投 竹崎▽試合時間 1時間43分▽審判 文野、久保、扇谷、稲川

【評】小技に足を絡めた追手前が相手のミスにも乗じて、11安打10得点で六回コールド勝ちした。1―0の五回、渡辺が3球連続でセーフティーバントを試み、出塁に成功すると盗塁や暴投などで生還。森木、中川、立花の中軸が五、六回に3連打を放つなど、計9得点を挙げて試合を決めた。

丸の内の先発竹崎は4回までは1安打1失点と粘りの投球。打線は1点を追う三回、中田遼と武林の安打などで1死満塁としたが、後続が併殺に倒れ、反撃の波をつくれなかった。（平野愛弓）

【追手前―丸の内】5回裏追手前2死二、三塁、立花の内野安打の間に2者が生還、5―0と突き放す（高知球場＝河本真澄撮影）

### 「単独」の夢かなう

⚾…7年ぶり単独出場

の丸の内。主将竹崎は「夢がかなった。負けたけど悔いはないです」。全力を出し切った試合に満足感をにじませた。

竹崎と捕手武林は、1年生の時から2人きり。こつこつ勧誘を続け、メンバーを集めてきた。

2人の最後の夏、グラウンドには心から野球を楽しむ姿があった。竹崎が三振を奪えば「ナイスボール！」と声が飛び、安打した武林が雄たけびを上げれば、呼応してベンチも沸いた。

「一緒に練習して、単独チームになって、同じ気持ちで野球ができた。頑張ってきてよかった」と武林が言えば、2年中田遼は「頑張りゆうと思ってもらえるチームになりたい」。先輩が見せてくれた姿を追いかける。（平野愛弓）

2023（令和5）年7月17日付朝刊

（高知新聞社より掲載許可済）

## ★寄贈のお知らせ★

丸の内高校同窓会会長　殿

### 本校同窓会への寄付金の申出書

私達６回生は、６回生同級会を結成し「おきゃく電車」に乗車、「母校に表敬訪問」・「桂浜荘での中秋の名月鑑賞会」・「料亭濱長での喜寿、傘寿を祝う会」等の同級会を開催してきました。

今年「米寿を祝う会」を計画、案内をしましたが、高齢・コロナ等の関係で参加者が極少数でしたので開催を断念しました。６回生同級会も今回の企画で、活動を終了します。

つきましては、会員から預かっている会費から通信費、会報の送料等に使用し、残高が36,212円在りますが、今後活用の予定がありませんので、本校同窓会に寄付したいと思います。 金37,000円を同封いたしますので、本校同窓会の活動に使用下さい。

丸の内高校・同窓会の益々の発展を祈念しています。

令和５年６月30日

６回生世話役　飯田　正

＊有り難うございます。いろいろな活動に使わせていただきます。

## 令和四年度卒業生 同窓会世話人

3年1ホーム　**笹岡穂乃香（理事）**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。まだまだ未熟ですが、世話人としての役目をしっかり果たせるよう頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

3年1ホーム　**水田　利奈**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました水田です。任された責任をしっかりと果たせるよう精一杯頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

3年2ホーム　**石川　大和**

今回、世話人になりました石川です。世話人として、母校をもり立てていけるよう、自分の仕事をきっちりこなしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

3年2ホーム　**鬼頭亜結（副理事）**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。未熟者ではありますが、世話人としての務めをしっかり果たせるよう尽力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

3年3ホーム　**北村萌絵（副理事）**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。分からないことばかりですが、精一杯頑張りますので、よろしくお願いいたします。

3年3ホーム　**下村彩巴（副理事）**

この度同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。自分の役目をしっかり果たせるように頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

3年4ホーム　**大原　遼子**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。責任をもってこの役を果たしていこうと思うので、よろしくお願いします。

3年4ホーム　**島村まひる**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。自分の仕事はしっかり果たせるように頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

3年5ホーム　**村田さくら**

この度、同窓会世話人を務めさせていただくことになりました。役目を果たせるよう精一杯努めますので、どうぞよろしくお願いします。

3年5ホーム　**山中　陽向**

今回、世話人になりました山中です。務めをしっかり果たせるよう頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

3年6ホーム　**酒井　萌花**

今回、世話人になりました酒井です。責任を持って役目をしっかり果たせるように頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

3年6ホーム　**堀江　結**

今回、世話人になりました堀江です。みなさんとの思い出をさらに作っていけるように、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

## ◆理事会報告◆

八月二十七日の理事会では、戸田会長より三月二十五日以降の事業について報告があり、入学式にバッジを生徒に贈ったこと、関東・関西両支部の総会・懇親会の状況が報告された。

続いて、協議事項では①「公孫樹」の原稿の集まりや進捗状況について、広報委員長より報告があり、了承された。

②執行部より、今年度の総会及び懇親会の日程と、そのタイムスケジュールが示された。具体的には、九月九日の高知新聞への掲載内容、学校招待者、学年理事による参加人数の把握、ミニコンサートの依頼の状況、参加者への景品提供等について、提案があった。この件に「フラダンスの参加は？」「参加賞として米などは？」「次回の理事会の報告で間に合うか」などの意見が出され、それに本部の見解が示され、本部一任となった。

③同窓会名簿の発行について「個人情報の取り扱いの観点から、今までお願いしてきた業者との面談を九月六日に行い、その内容を次回の理事会に示し諮る」とする案が示され、承認された。次回の理事会の日程と審議内容が示され、終了。

### 【お詫びと訂正】

「公孫樹32号」の記載に誤植による誤りがありましたので、訂正しお詫び申し上げます。

▼4頁2段目　三谷廣子さんの1行目
誤：二〇二〇年三月
正：二〇〇二年三月

同4段目26行目
誤：明治の開校　正：明治の開港

▼山地亜紀さんの13頁2段目21行目
誤：二百二十九名　正：二十九名
＊HPでは訂正済み

▼26頁3段目同窓会世話人一人目と28頁2段目14行目の理事氏名
誤：岩本里緒　正：岩本理緒

# 令和5年度同窓会役員名簿 R5.10.1.現在

会長　戸田　隆（丸11回）
副会長　福井　和子（丸8回）
〃　長野　道夫（丸15回）
〃　近藤　泰清（丸16回）
〃　中村　光一（丸17回）
〃　中内　啓二（丸12回）
事務局長　和田　隆子（第一50回）
理事　中屋　辰子（第一55回）
〃　大平　和栄（丸1回）
〃　畑山　育子（丸1回）
〃　山本　忠智（丸2回）
〃　町田　明士（丸5回）
〃　橘　環（丸5回）
〃　明坂　守隆（丸5回）
〃　飯田　正（丸6回）
〃　渋谷　俊昭（丸7回）
〃　西野　愛子（丸7回）
〃　池　紀子（丸8回）
〃　今村　嘉宏（丸8回）
〃　川村　邦宏（丸8回）
〃　國松　勝（丸8回）
〃　島村　三省（丸9回）
〃　久保　衛（丸9回）
〃　森本　忠彦（丸9回）
〃　山本　幸廷（丸10回）
〃　長田紘一郎（丸11回）
〃　堀部　興紀（丸11回）
〃　博田　俊一（丸11回）
〃　小坂　英敏（丸12回）
〃　松浦　寿子（丸12回）
〃　森本　晴郎（丸13回）
〃　加藤　奉良（丸14回）
〃　河村　幸恵（丸14回）
〃　脇　久子（丸14回）
〃　中石　奉子（丸15回）
〃　中内　豊治（丸15回）
〃　井上　三郎（丸16回）
〃　比江森信子（丸16回）
〃　岡林　桂子（丸16回）
〃　山崎　修身（丸17回）
〃　古川　博子（丸20回）
〃　近森　裕子（丸20回）
〃　竹倉　美智（丸22回）
〃　中平　妙子（丸22回）
〃　笠原　和子（丸25回）
〃　豊永　輝子（丸25回）
〃　江野ゆかり（丸26回）
〃　田村　眞智（丸28回）
〃　黒石絵里子（丸32回）
〃　黒岩　淳子（丸33回）
〃　林　明子（丸33回）
〃　岩本やよい（丸43回）
〃　小島　彩（丸63回）
〃　秦泉寺彩乃（丸63回）
〃　岩本　理緒（丸73回）
広報委員長　明坂　賢治（丸17回）
広報委員　徳弘　千鶴（丸26回）
〃　中越　和代（丸26回）
〃　細美　香代（丸31回）
〃　長岡早百合（丸36回）
会計　橋本　博子（丸25回）
監事　入交　征章（丸11回）
〃　小笠原泰英（丸17回）
相談役　松木　健信（丸7回）
顧問　藤田　勇人（学校長）
関東支部長　藤村俊一郎（丸6回）
世話人代表（会計兼務）　松岡　悦子（丸18回）
世話人　小松　正一（丸14回）
〃　中山　澄江（丸20回）
〃　坂和　恵子（丸23回）
〃　坂本　佐智（丸25回）
〃　植松美寿恵（丸26回）
〃　山本　晃平（丸64回）
〃　工藤　辰哉（丸64回）
関西支部長　坂本　周一（丸8回）
会計　森田　繁男（丸8回）
世話人　池上　博美（丸8回）
〃　三嶋　香代（丸11回）
〃　佐々木朋子（丸12回）
〃　長沢　義喜（丸12回）

## 執筆者

『高知』
戸田　隆
藤田　勇人
中川　豊
小笠原美衛
谷　是
立元　稔章
戸田　隆彦
徳弘　朋子
中村　光一
小島　彩

『関東』
池神　重明
田中　公夫
福井　秀三
太田　節子
植松　壽惠
武政　美久

『関西』
坂本　融二

## 編集後記

▼今年度は各支部で懇親会を持つことが出来たと報告を受けている。同窓のつながりは継続の中でこそ、強い関係が保たれる。とにかく集いを持つことができたことを、ともに喜びたい。

▼今ＮＨＫの朝ドラ「らんまん」を、多くの視聴者が楽しみに観ていると思う。同時にメディアで「牧野富太郎」に関わるイベントや関連事業の紹介、親交のあった牧野からの手紙や文書などの新たな資料などの発見も報道され、各地で牧野ブームが起き、盛り上がっている。

▼谷是氏の『らんまんの笑顔・人間牧野富太郎伝』を読む機会があった。取材は、報道だけでなく人を語る上でも欠かせない。聞き取りは、取材をすることによって見えてくる周りの反応や動きを明らかにするだけでなく、そこに展開される本質的な事実を暴き出し、人がどう関わり、どう生きようとしたかを赤裸々に浮き彫りにしてくれるものだった。

▼沢山の方々から寄稿をいただいた。それは理事や同友からの声かけによるもので、大変有り難く思う。会員以外の方にも読んでいただきたいとの思いから、同窓会では広報のあり方を検討してきた。媒体を紙面だけでなく電子媒体の活用も考え、平成二十八年より「高知丸の内高校」のホームページに、同窓会欄を設けていただき、同窓会報紙『公孫樹』を掲載している。できるだけ多くの皆様に閲覧していただければ幸いである。

広報委員長　明坂　賢治